

エコフェミニスト神学における聖書の位置づけ

—ローズマリー・ラドフォード・リュースーとイヴォネ・ゲバラから—

東 よ し み
大 宮 有 博

はじめに

2019年4月、関西学院大学キリスト教と文化研究センター(RCC)は研究プロジェクト「エコロジカル聖書解釈」をスタートさせた¹。環境危機への応答として発展したエコロジカル聖書解釈は、人間を人間以外の被造物から分断し優位におくヒエラルキー的二元論を克服しようと試み、人間だけではなく全ての被造物と被造世界全体が神の救済、解放の対象であることを主張する²。このような聖書解釈は1990年代の終わり頃から試みられ、2004年にはアメリカ聖書学会(the Society of Biblical Literature)にエコロジカル聖書解釈セクション(当初はコンサルテーション)がおかれた。このセクションの参加者によって作られたThe Earth Bible Teamは、既にThe Earth Bible Seriesを出版し、この解釈方法による聖書の読みを呈示している。

他方で、1980年代に主に北アメリカで萌芽したエコフェミニズムは、自然世

1 プロジェクトのメンバーは大宮有博(代表・法学部教授)、水野隆一(神学部教授)、東よしみ(神学部准教授)、大澤香(神戸女学院大学文学部専任講師)。

2 「エコロジカル聖書解釈」に関しては、大宮有博「エコロジカル聖書解釈とは何か」『関西学院大学キリスト教と文化研究』19号(2018年):99-114頁を参照。この論文では、エコロジカル聖書解釈がこれまでの人間中心主義的・男性中心主義的な聖書解釈を批判し、聖書の救済史が人間だけでなく全ての被造物を包括していることを再発見したことを議論した。同時に、今後の課題として、エコロジカル聖書解釈による神論、救済論のさらなる展開を指摘する。

界に対する抑圧が女性に対する抑圧と連動し、思想的に密接に結びつくことに着目する。エコフェミニストの指摘によれば、人間中心主義的なヒエラルキ的二元論は、男性中心主義をも同時に内包する。エコフェミニズムは、このような二元論を批判し、すべての生きとし生けるものに内在的な価値を見出して、人間と他の生物との間に連続性を見る。このような思想的立場のもとに聖書を解釈するエコフェミニスト聖書解釈は、近年のエコロジカル聖書解釈の主要な潮流となったと言ってよい。

RCC研究プロジェクト・エコロジカル聖書解釈では、エコフェミニスト神学とエコロジカル聖書解釈の重要な論文を取り上げて共同討議を重ね、エコフェミニスト聖書解釈が近年エコロジカル聖書解釈の主要な潮流となったことを確認した。この共同討議の成果のひとつでもある本稿では、エコフェミニスト神学のパイオニアであるローズマリー・ラドフォード・リューサーとブラジルのエコフェミニスト神学者イヴォネ・ゲバラの神学に焦点を合わせて、2人が聖書をどう位置づけ、どう読むかを検討する。リューサーとゲバラは相互に深く影響を与え合っているが、近年のリューサーはゲバラとの対話を経て、初期の立場から変遷している。本稿では、まずエコフェミニズムの定義を、リューサーとゲバラによる定義から確認する。そのうえで、リューサーの『性差別と神の語りかけ』（原著は1983年）³と *Gaia and God*（1994年）⁴からリューサーの立場を議論する。次にゲバラの主著である *Longing for Running Water*（1999年）⁵からゲバラの神学における聖書の位置づけと彼女の聖書の読み方を検討する。さらに、リューサーがゲバラから影響を受けて、その神学をどう展開させたかを、リューサーの論文“Ecofeminism”（2000年）⁶から指摘する。

3 Rosemary Radford Ruether, *Sexism and God-Talk: Toward A Feminist Theology* (Boston: Beacon, 1983). [邦訳『性差別と神の語りかけ—フェミニスト神学の試み—』、小檜山ルイ訳、新教出版社、1996年]

4 Rosemary Radford Ruether, *Gaia and God: An Ecofeminist Theology of Earth Healing* (San Francisco: HarperSanFrancisco, 1994).

5 Ivone Gebara, *Longing for Running Water: Ecofeminism and Liberation*, trans. David Molineaux (Minneapolis: Fortress, 1999), 131-132. 原著は *Teologia Ecofeminista: Ensaio para pensar o Conhecimento e a Religião* (São Paulo: Olho d'Água, 1997)である。

6 Rosemary Radford Ruether, “Ecofeminism: the Challenge to Theology,” in

1. エコフェミニズムとは

本節では、エコフェミニズム／エコロジカルフェミニズム⁷とは何かを明らかにする。「エコフェミニズム」は、フランスのフェミニスト、フランソワーズ・デュボンヌの著作『フェミニズムか死か』（1974年）で最初に用いられた概念であり、1980年代に北アメリカで広がった。80年代に日本でも青木やよひがエコフェミニズムを提唱したが、これは日本では根づかなかった⁸。

エコフェミニズムは、エコロジー革命を起こそうとする実践的な思想であり、男性による女性の身体や性の支配と人間による自然の支配は、同じ家父長的・男性優位のイデオロギーによってもたらされていると考える。エコフェミニズムの主張は以下の3つの側面に分けて整理できる⁹。第1の主張は、「環境破壊の最悪の被害者は女性である」（1989年の国連報告）というものである。女性が環境破壊による重荷を負わされている背景には、性役割分業と女性の社会労働からの疎外といった家父長制社会構造が存在する。第2の主張は、西欧では女性と自然は概念・象徴的に結びつけられてきたというものである。すなわち西欧文化は、女性を身体や感情、自然と結びつけ、男性を精神や理性、文明と結びつけた上で、前者を後者の下位におく。このような考え方をエコフェミニズムはヒエラルキー的二元論と呼び、その価値づけを批判し転倒することを目指す。第3の主張は、

Christianity and Ecology: Seeking the Well-Being of Earth and Humans, ed. Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether (Cambridge: Center for the Study of World Religions, 2000), 97-112.

7 両者は同義語であるが、近年短縮形のエコフェミニズムがより一般的に使われている。本稿では、以下エコフェミニズムに統一する。

8 80年代、青木やよひは女性原理を称賛するイヴァン・イリイチの前近代的エコフェミニズムを提唱した。これに対してマルクス主義フェミニズムの上野千鶴子は、女性原理称賛は女性差別の根底にある女性・男性の二項対立を温存することになると批判した。その後、日本ではエコフェミニズムは提唱されなくなった。横山道史「日本におけるフェミニズムとエコロジーの不幸な遭遇と離別—フェミニズムとエコロジーの結節点に関する一考察—」『技術マネジメント研究』6号（2007年）：21-33頁。

9 Heather Eaton and Lois Ann Lorentzen, "Introduction," in *Ecofeminism and Globalization: Exploring Culture, Context, and Religion*, ed. Heather Eaton and Lois Ann Lorentzen (Lanham: Rowman & Littlefield, 2004), 2-3.

環境破壊によって最も影響を受ける立場にたつ女性は環境について「認識論的な特権を持つ」というものである¹⁰。このように主張するエコフェミニズムは主に文学、社会学、哲学、宗教学といった分野で展開されている。

神学の世界にこのエコフェミニズムを導入したのがリユースである。そしてリユースの影響を受けたゲバラは、エコフェミニズムを貧困と暴力にあえぐ第三世界の女性の解放思想にまで高めた。2人によるエコフェミニズムの定義は以下である。

【リユースー】

エコフェミニズムあるいはエコロジカルフェミニズムは、女性支配と自然支配とがどのように相互に絡み合っているかを精査する。そして、密接に結びつく（男性による）女性支配と（人間による）自然支配がどのようにして始まり強化されたかをより深く理解することによって、このような相互に絡み合っている支配からの解放と癒しの戦略や世界観の構築を目指す¹¹。

【ゲバラ】

エコフェミニズムという肯定的な言葉は、自然世界の破壊と女性に対する抑圧という2つの否定的な状況から生まれた。エコフェミニズムは、家父長制によって引き起こされた生命の破壊に対抗する動きとして女性によって作り出された最近の言葉である。エコフェミニズムは、女性の尊厳のための闘いと生命の多様なプロセスの尊重とを結びつける明確な立場である¹²。

10 この点に関しては、女性が本質的に自然と近いと主張する本質論的な議論もあるが、イートンはこれを批判し、ほとんどのエコフェミニストは、この関係を本質的なものではなく、女性の生活の経験に基づくものであるとする。Eaton and Lorentzen, "Introduction," 3.

11 Ruether, "Ecofeminism," 97.

12 Ivone Gebara, "Ecofeminism," in *Dictionary of Feminist Theologies*, ed. Letty M. Russell and J. Shannon Clarkson (Louisville: Westminster John Knox, 1996), 76.

リューサーもゲバラも、男性による女性支配と人間による自然支配の根っこには家父長制社会構造があることを指摘する。そして両者ともに、この社会構造からの癒しと解放を目指す。「戦略や世界観」の構築を目指すリューサーは理論的、哲学的な傾向をもち、他方、「闘い」と「生命の多様なプロセスの尊重」を結びつけるゲバラはより実践的な傾向をもつことが見て取れる。

2. リューサーのエコフェミニスト神学における聖書

本節ではリューサーのエコフェミニスト神学における聖書の位置づけを『性差別と神の語りかけ』と *Gaia and God* から検討する。『性差別と神の語りかけ』においてリューサーは、主にフェミニスト神学の方法論を議論し、とりわけ「エコロジカル・フェミニスト自然神学に向けて」というセクションの中でフェミニスト神学がエコフェミニスト神学へと向かうことを明確にする¹³。本書でリューサーは、フェミニスト神学を解放の神学の流れの中に位置づける。フェミニスト神学の聖書解釈は、解放の神学のそれと同様、預言者的解放の伝統を規範として聖書テキスト自体を批判的な考察の対象とする。聖書テキストは、預言者的解放の伝統を反映する限りにおいて神聖なものであるが、そうでないテキストは率直に批判される¹⁴。フェミニスト聖書解釈の独自の点は、預言者的解放の伝統を女性のために用いる点にある¹⁵。リューサーは、聖書そのものを預言者的解放の伝統とは同一視しない。リューサーによれば、新約聖書には「解放の規範と家父長制の規範の対立」が、旧約聖書以上に存在する¹⁶。「社会学的な限界を持つ過去の文書」¹⁷である聖書テキストは、そのまま聖書の信仰の規範とはならない。むしろ、預言者的解放の伝統、あるいは「解放の実現した未来」こそ、

13 リューサー『性差別と神の語りかけ』、127-135頁。

14 リューサー『性差別と神の語りかけ』、49頁。

15 リューサー『性差別と神の語りかけ』、60頁は、「解放は被抑圧者の中で最も抑圧された者、つまり、被抑圧者の中の女性から始めるべきだ」と述べる。

16 リューサー『性差別と神の語りかけ』、62頁。

17 リューサー『性差別と神の語りかけ』、60頁。

聖書の信仰の規範である¹⁸。リューサーによれば、聖書の信仰の創造的ダイナミズムは、宗教の言葉の「預言者の意味合いを再構築」することにある¹⁹。

*Gaia and God*においてリューサーは、エコフェミニスト神学に有益な伝統として、聖書の、キリスト教的伝統の中から①契約の伝統と②秘跡的伝統という2つの思想の潮流を指摘する。契約の伝統は、人間と自然との関係や人間同士の関係を、法や倫理的な責任という言葉で捉えるのに対して、秘跡的伝統は、神的存在の臨在を恍惚状態の中で経験し、人間を交わりへと誘う²⁰。これらの伝統は家父長的な伝統の中で形成され、古代の世界観を反映させるため、現代の状況の中で再解釈する必要がある。

まず、旧約聖書にルーツをもつ契約の伝統は、歴史と自然とを対立させて考えることをしない。19世紀のプロテスタンティズムは歴史と自然とを分断的に捉えたため、西洋キリスト教において聖書は、実際よりも反自然的なものとしてされてしまった²¹。しかし、最近のエコロジカルな関心による聖書の読みは、このような近代ヨーロッパの歴史と自然の二元論は、聖書的な視点を歪めると指摘した²²。ヘブライ的な神理解によれば、神は、天と地の創造主であると同時に、イスラエルをエジプトから導き出した方である（例えば、詩136:6-15）。解放という歴史の行為に臨在した神は、同時に天と地を創造した神であり、創造と贖いとは異なる次元に分けて考えられていない²³。

契約の伝統の中で、リューサーは「ヨベルの年」の概念をとりわけ重要視し、ヨベルの年の、更新、再生、歪みの修正という考え方が、贖罪的なエコ正義の

18 リューサーは、「私たちは限界の中に留まるためではなく、新しい未来を指示するために、過去を使う」とする。『性差別と神の語りかけ』、60頁。

19 リューサー『性差別と神の語りかけ』、9頁。

20 Ruether, *Gaia and God*, 9.

21 このリューサーの指摘は、エコロジカル神学のきっかけとなったリン・ホワイトの主張を意識したものである。Lynn White Jr., "The Historical Roots of Our Ecologic Crisis," *Science* 155 (1967): 1203-1207. [邦訳「現在の生態学的危機の歴史的根源」『機械と神—生態学的危機の歴史的根源—』、青木靖三訳、みすず書房、1999年、76-96頁]

22 Ruether, *Gaia and God*, 207.

23 Ruether, *Gaia and God*, 207-208.

模範を提供すると主張する²⁴。7年に一度の安息年のサイクルで、貧しい人々と動物、土地の再生、ヘブライ人の奴隷の解放が行われ、50年に一度の「ヨベルの年」において不正義な関係性が修正される²⁵。黙示的な贖罪のモデルが「一度きり」の悪の破壊を約束するのとは異なり、ヨベルの年のヴィジョンは、関係性の定期的な正常化を約束する。関係性の正常化というヴィジョンは、創造の完成であるメシア的な未来にも想定される。そこでは人々の間の平和が回復され、自然に対する敵意が癒され、動物間の敵意でさえなくなる（イザ65章）。

このような神とイスラエルとの契約関係における自然との正しい関係と正義という伝統は新約聖書では失われるとリューサーは指摘する²⁶。ヨベルの年は、イエス自身の神の国の理解ではおそらく重要であったと考えられるが、ルカによる福音書においては、関心の中心は人間同士の正義に移り、土地の回復、動物、大地の休息への言及は見られない²⁷。キリスト教が発展するにつれ、この世的な正義への関心は薄れ、メシアであるイエスの宇宙論的、霊的な理解に取って代わられた。キリスト教は、自分たちが「新しい契約」の民であると主張したにもかかわらず、土地との関係という契約的な概念は切り捨てた。キリスト教において、ユダヤ教の民族的な「民」という概念は、普遍主義的、帝国主義的な「神の民」という概念にとって代われ、約束の地は、宇宙全体とりわけ、地上を超越する宇宙の部分、すなわち「天」として再解釈された²⁸。

この契約的な伝統においては、人間は「世話をする人」として他のいのちとの関係において特別な位置を占める。「世話をする人」は、他のいのちを創造し

24 Ruether, *Gaia and God*, 213.

25 なおリューサーは指摘していないが、安息年法は契約の書（出23:10-12）では土地の安息とされているが、申命記法（申15:1-11）では負債免除の法とされている。ヨベルの年法（レビ25章）は、両者を統合して、安息年を認めつつ、他方で50年周期の「ヨベルの年」を新しく設け、そのことによって申命記法典における「負債免除」をより現実的な形で受容しようとした。魯恩碩『旧約文書の成立背景を問うー共存を求めるユダヤ共同体ー』、教文館、2017年、112-119頁を参照。

26 Ruether, *Gaia and God*, 214. リューサーはここで「主の恵みの年」（ルカ4:18-19）を念頭においている。

27 Ruether, *Gaia and God*, 215.

28 Ruether, *Gaia and God*, 215.

たのではなく、他のいのちを独占的に所有する者でもない。しかし、最終的にはいのちの真の源である神に対して、そのいのちに対して責任を持つ。この契約的なヴィジョンによれば、人間と他のいのちは、ひとつの家族の部分であり、相互に依存しているひとつのコミュニティーにおける兄弟姉妹である²⁹。

次に、新約聖書に見られる秘跡的伝統は、キリストを神の宇宙的な顕示と見る。この伝統においては、神は、遍在する神的な源、創造の根本であると同時に、最終的な贖いの源である。また、キリストは宇宙の創造者であり贖い主である。このようにキリストを、宇宙から切り離された単なる人間としてだけ見るのではなく、創造者であり贖い主としても見る宇宙論的なキリスト理解は、新約聖書思想の中心にある。にもかかわらず、西洋のキリスト教は、中世後期と宗教改革以降、この全体的なヴィジョンを軽視して、墮落した被造物と神との違いを強調し、神秘主義や秘跡的な自然観からは離れていった³⁰。リューサーは、この宇宙論的な神学と霊性を取り戻す必要性を主張する³¹。

キリストと宇宙論的なロゴスとの同一視はパウロ、ヨハネ、ヘブライ書に見られ、この宇宙論的なキリスト論はコロサイの信徒への手紙1:15-20で十全に表現される。ここでは創造と贖罪という2つのドラマが、ロゴスーキリストという表象の中にもちこまれる³²。また、リューサーは、エイレナイオスの神学を、創造と受肉、完成をひとつの宇宙的な出来事の全体の中に統一しようとするものとして評価する³³。しかしながら、エイレナイオス（そしてパウロ他のキリスト者）にとって救済は有限性の超克であったため、人間の贖いも宇宙全体の贖いも有限性の超克としてしか考えられなかった。このような被造物の贖いという考えは、黙示的終末論に従って、地上的な生の終末論的な祝福と新天新地への変革とい

29 Ruether, *Gaia and God*, 227.

30 Ruether, *Gaia and God*, 229, 238.

31 Ruether, *Gaia and God*, 229.

32 Ruether, *Gaia and God*, 232.

33 Ruether, *Gaia and God*, 235. 「受肉において、神の創造的な力は再生され、神的力量はより深い仕方では身体的自然に浸透する。身体的なものは、神性の秘跡的な担い手になり、神的力量は身体的なものを神化する。キリスト教の秘跡は、創造の力を再生し、体と霊のより深い交わりの範例である」。

う2つの段階で考えられた。地上的な祝福を救済に含めようとするこのような努力は、3世紀以降の正統派キリスト教の中では失われていった³⁴。

正統派キリスト教は、千年王国論に見られるような躓われた地球というヴィジョンを軽視した。しかしながら、中世の東西キリスト教において、創造の原理としての宇宙進化的 (cosmogonic) ログスという考えは、神に至る存在論的な「はしご」という見解の基礎となった³⁵。自然は神からの下降 (descent) の流出的なステージ (神から天使的存在、人間、動物、植物、岩、山、川という存在の段階) として理解された。しかし、このような世界観は唯名論とともに中世後期において衰退する³⁶。神と人間との距離は、神の啓示によってのみ橋渡しされるものとされ、人間の観想や神との神秘的な一致を求める努力は否定された³⁷。しかしながら、秘跡的伝統は、新約聖書から始まってキリスト教伝統に存在していたのであり、リューサーは現代のエコロジカル神学に、秘跡的伝統を受け継ぐ3つの神学の型を指摘する³⁸。

リューサーは、契約的な伝統と秘跡的伝統の中から、自然からの2つの神性の声を聞く³⁹。山の上から弱者のために語り、力のないものを守る男性的な神の声と、男性的な声によって沈黙させられてきたもうひとつの女性的な声、事柄の内面から語る「ガイアの声」である⁴⁰。このようにリューサーは、旧約聖書からは契約的伝統を、新約聖書からは秘跡的伝統をエコロジカル靈性に有益な伝統として取り上げ、これらの再解釈を試みる。この際、批判の規範となるのは、健全で持続可能な社会という未来の目標である⁴¹。これは預言者的解放の伝統の

34 Ruether, *Gaia and God*, 236-7.

35 Ruether, *Gaia and God*, 237.

36 唯名論にとって、宇宙はもはや神的本質を開示するのではなく、単に神の「秩序づけられた意志」を開示するだけであった。Ruether, *Gaia and God*, 237.

37 Ruether, *Gaia and God*, 238.

38 リューサーは、①マシュー・フォックスによって代表される創造に中心をおく靈性、②ピエール・テイヤール・ド・シャルダンによる進化論的アプローチ、③アルフレッド・ホホワイトヘッドなどのプロセス神学を指摘する。Ruether, *Gaia and God*, 241.

39 Ruether, *Gaia and God*, 254.

40 Ruether, *Gaia and God*, 255.

41 Ruether, *Gaia and God*, 特に258.

延長線上にあり、人間以外のいのちをより明確に射程にいられたエコロジカルな視点を含むものである。『性差別と神の語りかけ』と *Gaia and God* においてリューサーは、預言者的解放の伝統、健全で持続可能な未来の社会を聖書を批判する規範とした上で、聖書の伝統を批判的に再解釈する。

3. ゲバラのエコフェミニスト神学における聖書

リューサーが預言者の解放的伝統を聖書解釈の規範として主張するのに対して、ゲバラは聖書を日常生活における女性たちの闘いの経験を解釈の規範として主張する⁴²。ゲバラは、聖書を「神の言葉」とは呼ばず、いのちとは何か、いのちがなぜ存在するかを探求する人間の言葉と呼ぶ。したがって貧困や環境の破壊、差別などの困難に満ちた日常生活を生き抜こうとする貧しい人々の闘いの経験から紡ぎ出される言葉は、聖書と同等の権威があるとする。また、いのちの存在の意義を問う他の文化や宗教の古典も同様の権威があるとする⁴³。この点は聖書を神の言葉あるいは神の啓示として絶対の権威とする一般的なプロテスタントの考えとは大きく異なる。

しかしゲバラは決して聖書を神学の隅に追いやっているのではない⁴⁴。彼女が問題としているのは、教会の伝統的な聖書解釈が人間中心主義的かつ男性中心主義的な社会構造を正当化する点である。これを乗り越えるために彼女は、ブラジルの周縁化された貧しい女性の日常生活の闘いの経験から聖書を読みなおそうとしているのである。

ゲバラの聖書解釈ないしは神学の規範は、あくまでも貧しい女性の日常生活を生き抜こうとする闘いの経験である。ゲバラは男性の経験は科学的・哲学的知見とされて「真理」とされるのに対して、学ぶ機会を奪われた貧しい人々や

42 Ivone Gebara, "Ecofeminism: A Latin American Perspective," *Cross Currents* 52 (2003): 93-103, esp.95.

43 Gebara, *Longing for Running Water*, 131-132.

44 Gebara, *Longing for Running Water*, 131.

女性が日々の経験からつかみ取った知見は「経験知」とされて一段低く見られることを「知の序列化」と呼び、批判する⁴⁵。

「経験」とは、苦しみにあえぐ人々—ゲバラにとってはとりわけ社会の隅におかれた女性たち—が肌身で感じる具体的な現実である⁴⁶。ゲバラは第三世界のエコフェミニズムが生じる「経験」に関して次のように述べる。

私はエコフェミニズムを、日常生活、人々の間の日々の分かち合い、路上のごみ、悪臭、下水道と安全な飲み水の欠如、貧しい栄養状態、不適切な医療に共に辛抱することから生まれるものであると感じています。エコフェミニストの課題は、公営のごみ収集がないこと、ねずみ、ごきぶり、蚊の繁殖、子どもたちの肌の腫れから生まれるものです。日々のサバイバルの問題に対処し、家を掃除し、子どもたちを洗うのはたいがい女性なのです⁴⁷。

これはゲバラが身をおくブラジルの貧しい女性の日常生活である。ゲバラはこのような日常生活を、家父長制社会構造によって形成された「監獄」と呼ぶ⁴⁸。家父長制社会構造は、強者による支配を確立するために、あらゆるものを分断して序列化する。例えば人間文明から自然環境が分断され、前者が後者を支配する。同様に世界システムは、国、地域、エスニシティ、ジェンダーの間を分断し序列化し、強者は弱者を周縁化して貧困や環境破壊のしわ寄せを押し付ける。第三世界の貧しい女性は家父長制社会構造に自由と声を奪われて拘束されているのである⁴⁹。

45 Gebara, *Longing for Running Water*, 25.

46 Gebara, *Longing for Running Water*, 182.

47 Gebara, *Longing for Running Water*, 2. 引用は藤原佐和子「ラテンアメリカのエコフェミニスト神学とイヴォネ・ゲバラ—Longing for Running Water (1991年)を中心に—」『基督教研究』80巻1号(2018年): 47-48頁を使用した。

48 Gebara, "Ecofeminism, A Latin American Perspective," 95.

49 ゲバラはエドアルド・ガレアーノの詩“nobodies”を引用してこの点を説明する。Gebara, *Longing for Running Water*, 26.

伝統的神学は、このような家父長制構造に根ざしていると同時に、それを正当化するものである。すなわち伝統的の神学は、創造主である神と被造世界、人間と自然、男と女を分け、前者は後者より決定的に優れているとし、前者による後者の支配を正当化する⁵⁰。このようなヒエラルキー的二元論によって構成される伝統的の神学は、貧しい女性を「監獄」である彼女たちの日常生活から解放する思想とはなりえない。ゲバラは、このような日常生活から貧しい女性たちを解放するための世界観としてエコフェミニスト神学を提起する。

ゲバラのエコフェミニスト神学は、女性や貧しい人々、先住民と言った民衆の視点で「ひとつの聖なる身体」(one Sacred Body)である宇宙を解釈しようと試みる。ゲバラによると、神に創造された全てのもの一人間、人間以外の動物、植物、地、海、宇宙などが神の「ひとつの聖なる身体」に包まれて、その中に宿り、その身体を構成している⁵¹。私たち人間を含めてあらゆるものはこの「聖なる身体」に有機的につながっていて、その身体から独立して存在することはできない。この宇宙観は、欧米の聖書解釈ないしは伝統的の神学に埋め込まれているヒエラルキー的二元論の克服を目指すものである。経済詐欺による環境破壊とは、この聖なる身体の一部であり神によって創造された「地」を売り買いし、「地」に売春を強いて富を蓄積することである⁵²。貧しい女性の日常生活における困難も、この「聖なる身体」の痛みのひとつである。しかし、この人間、被造物、「地」を包括する「聖なる身体」は、搾取される対象ではあるが、同時に救いをもたらす主体にもなる可能性を持つ。ゲバラは、この「聖なる身体」という宇宙論を前提として聖書の新しい読みを試みる。

50 ゲバラは具体的にどの神学とは言わないが、「神の絶対他者」と「自由な大能」を主張するバルトの神学はこの良い例となるであろう。またゲバラは解放の神学も例外ではないと述べる。Gebara, *Longing for Running Water*, 26.

51 「ひとつの聖なる身体」はゲバラの神学の鍵となる言葉で、ゲバラの著書に繰り返し用いられる。ここではGebara, "Ecofeminism," in *Dictionary*, 77を例として挙げる。この概念は、サリー・マクフェイグの受肉の神学 (Sallie McFague, *The Body of God: An Ecological Theology* [Minneapolis: Fortress], 1933) に依拠していると考えられる。「ひとつの聖なる身体」という宇宙観は、私見では、汎神論というよりも万有内在神論に分類される。Gebara, *Longing for Running Water*, 183-184も参照。

52 Gebara, *Longing for Running Water*, 18.

ゲバラによる聖書の読みの実例として、*Longing for Running Water*における「罪深い女性の話」(ルカ7:36-50)の読みをとりあげよう⁵³。ゲバラはこの物語を読むに際して、イエスの中心的役割を括弧に入れて、これまでの読みでは脇役とされてきた罪深い女性に注目する。この女性は物語の中でイエスに触れて彼の足に香油を塗る。彼女がこのようにイエスを追求したのは、イエスがそうせよと彼女に命じたからではない。彼女は自分の意志でイエスをそのように愛そうと決定し行動したのである。これは彼女の心の中に生まれた愛の故である。このようにゲバラは、イエスの彼女に対するふるまいにではなく、彼女の主体性に注目する。

これまでキリスト教会は、キリスト者—とりわけ女性たち—に対して、自分を犠牲にして他者を愛し他者に仕えるようにと教えてきた。また、権威を持つ人に従順であるようにとも教えてきた。そのためキリスト者は、愛が持つ2つの極—すなわち「自分自身に対する愛」と「隣人愛」—を忘れてきた。「自分を愛するように他人を愛しなさい」(マタ19:19)というイエスの命令は、他人だけではなく自分への愛も含むものである。

家父長的な福音書の読みは、イエスの教えや奇跡、ふるまいに注目するあまり、大切なことを度外視している。換言するとこのような読みは、「罪深い」と言われた女性、手の動かない男性、子どもたちに関心を持たず、このような人々が日常生活において貧困や差別と闘い続けていたということに無関心である。これはイエスが目指していたこととは異なる。私たちが、最も小さくされた者たちに注目することによって、彼／彼女らは、自身の能力、創造力、救いを追求しようとするあり方を発展させることができる。これがイエスの論理である、とゲバラは主張する⁵⁴。

ゲバラはこのように福音書を読むことによって、新しいキリスト論を構築する意図はないと明確に述べる。むしろ彼女は、イエスをドグマ的なキリスト論

53 Gebara, *Longing for Running Water*, 179-180.

54 Gebara, *Longing for Running Water*, 180.

の枠から解放することを意図している⁵⁵。この点で、ゲバラは、宇宙論的キリスト論を提起するリユーザーとは異なっている。

では、イエスをキリスト論から解放する読みとはどのような読みであろうか。ゲバラによれば、「福音書を読む」とは、「イエスの弟子たちの間で交わされた『会話』(dialogue)を継続しようとする人々の経験から始め、彼女／彼らの経験を共有し、その経験を福音書の伝承と統合することである」⁵⁶。「イエスの弟子たちの間で交わされた『会話』を継続する人々」とは、キリスト者のことではない。イエスの弟子になった人々—罪人と呼ばれ女性、障害や病の人々、子どもたちなど—は、貧困や差別に満ちた日常生活を生き抜くために闘ってきた人々である。そのような人々がイエスとの間で交わした会話こそが聖書の物語である。その会話を、現代の日々を生き抜くのに闘う貧しい人々—ゲバラにとってはブラジルのスラムの貧しい女性たち—の会話に統合するのである。同時代の貧しい人々との会話のなかでイエスが宣べ伝えたことは、自分自身についてではなくて、一つひとつのいのちの尊厳といのちの豊かさである⁵⁷。このようなイエスの弟子たちの「会話」をキリスト論に収斂する必要はない。

これまでの神学—そこには解放の神学も含まれる—のキリスト論をゲバラは、「過度のイエスの中心性」と呼んで批判する⁵⁸。これまでのキリスト論は、イエスを救済者、英雄、殉教者、王、勝利者、唯一の神の子と同定した。このようなキリスト論は、例えば先に紹介した「罪深い女性の物語」に登場する女性が自らの決断で行動したという主体性を度外視し、この女性をイエスの物語の脇役として物語の隅においやってしまう。このような聖書の読みは、女性たちが

55 Gebara, *Longing for Running Water*, 183.

56 Gebara, *Longing for Running Water*, 174-175. 「私は、イエスの弟子たちの間で交わされた『会話』を継続することを追求する人々の経験から始めたい。すはわち彼女／彼らがまさに経験していることをシェアし、その経験を彼女／彼らが伝承してきた福音伝承と統合するのである」。ここでゲバラが「イエスの弟子たちの間で交わされた『会話』」とし、「イエスと弟子たちの間で交わされた会話」としていないのは、福音書の読みの中心をイエスからイエスのもとに集った弟子たちに移す意図があると考えられる。

57 Gebara, *Longing for Running Water*, 184.

58 Gebara, *Longing for Running Water*, 177.

抑圧の対象であると同時に解放の主体であることを福音書の物語から明らかにすることはできない。また、このような「過度のイエスの中心性」は、キリスト教を絶対視してそれ以外の宗教では救いに至らないとする宗教的排他主義に陥ってしまう。イエスは権力の中心ではない。むしろイエスは私たちのなかにある愛の力の中心である。そして全ての人をその互いに愛し合う共同体に招く包括的な象徴である⁵⁹。

このようにキリスト論という枠組みに疑問をもつゲバラにとってイエスは、1人の人、1世紀地中海世界に生きた大工として、その時代や文化に限定される。とはいうものの、受肉はナザレのイエス以上のものである。イエスもまた私たちの「聖なる身体」の一部である。受肉とはイエスだけに限定されるものではなく、私たちも含めた身体的なリアリティに関わる。イエスは私たちにとって、神が私たちとともにいることの象徴である⁶⁰。

このようにゲバラは、日常生活における解放のために闘う女性たちの経験を、聖書を読む際の規範とする。また、ゲバラは、新しいキリスト論の構築を志向する今までの聖書解釈が、イエスの時代と現代の貧しい人々たち—とりわけ女性たち—の会話を遮断してしまうと批判し、同時に、教義的なキリスト論は、キリスト教の絶対性につながると批判する。

4. リューサーのエコフェミニスト神学の展開

リューサーは、2000年の論文“Ecofeminism”において、ゲバラの影響を受けて、よりラディカルな立場を展開する⁶¹。リューサーは、聖書と聖書に基づいたキリスト教の伝統に見られる男性中心のかつ人間中心主義的な宇宙観を批判の

59 Gebara, *Longing for Running Water*, 181.

60 Gebara, *Longing for Running Water*, 184-185.

61 リューサーとゲバラの影響関係に関しては、リューサーが編集しゲバラが寄稿する *Women Healing Earth: Third World Women on Ecology, Feminism and Religion*, ed. Rosemary Radford Ruether (Maryknoll: Orbis, 1996) のイントロダクション(1-8)と Gebara, “Ecofeminism: A Latin American Perspective” も参照。

対象とし、キリスト教の伝統的な教義の再構築を試みる⁶²。本稿においてリユースーは、罪、救済、神理解、メシア神話に関するゲバラによる批判を受け入れ、ゲバラが代わりに提示する神学を受け入れるが、その中で最も重要なのは、ゲバラによる内在的な神理解である⁶³。ゲバラによれば、三位一体は、相互依存的な創造性のプロセスとしての、いのちの基本的なダイナミズムの象徴的な表現である⁶⁴。リユースーは、このような内在的な神理解は、啓示の場を「私たちの自然の経験」におくとした上で、「私たちは、私たちの歴史的な聖典を、自然という本に照らして読み（かつ批判する）」と述べる⁶⁵。ゲバラは、聖書を批判する規範として人間—とりわけ貧しい人々の経験を—おくが、リユースーは、これをさらに「私たちの自然の経験」とする。なお、内在的な神の臨在を顕す「自然」は、理想化されず、暴力的で悲劇的な力を持つものであることが認められる⁶⁶。

リユースーは最後に預言者の伝統にも言及する。リユースーは、「自然」と「歴史」から2つの啓示的な命令を聞くが、1つ目は、持続可能性への自然からの呼びかけであり、2つ目は、罪と恨の歴史からくる、貧しい人々への配慮の命令である⁶⁷。前者の「自然」からの命令は、*Gaia and God*ではガイアの声とされた声であり、後者の「歴史」からくる命令は、預言者の伝統の流れをくむ声である。2つの命令はしばしば緊張関係にたつが、われわれは二元論に陥ってはならず、持続可能性と正義との間の正しいバランスをとる必要がある、とリユースーは主張する⁶⁸。

以上のように、リユースーは、2000年の論文“Ecofeminism”では、ゲバラの

62 Ruether, “Ecofeminism,” 97-112. 「エコフェミニズムにおけるフェミニスト神学の深まりとともに、初めて男性中心的な宇宙論が疑問に付されるようになり、キリスト教のストーリーの人間論におけるジェンダーの関係だけでなく、その全体の構造と格闘する必要があるという認識が起こった」。Ruether, “Ecofeminism,” 103.

63 Ruether, “Ecofeminism,” 107.

64 Ivone Gebara, “The Trinity and Human Experiences,” in *Women Healing Earth*, 13-23.

65 Ruether, “Ecofeminism,” 108.

66 「自然は、いのちがいかに痛ましく悲劇的な方法でバランスを保っているのかを啓示する」。Ruether, “Ecofeminism,” 108.

67 Ruether, “Ecofeminism,” 109.

68 Ruether, “Ecofeminism,” 110.

神学に大きく依拠し、*Gaia and God*の立場からのさらなる変化を見せる。とりわけ、聖書を批判する際の根拠となる規範に関する変化が重要である。「経験」を根拠に聖書を読むというゲバラの立場を受け入れ、リユースーは、「私たちの自然の経験」を根拠に聖書を読む。預言者の伝統は、「歴史」から聞こえる啓示的な声として言及はされるものの、もはや、聖書を批判する根拠として前面には出てこない。代わりに、内在的な神が自己を啓示する「自然」と、私たちによるこの自然の経験とが、聖書を批判する際の規範となる⁶⁹。

終わりに

以上のように、リユースーは『性差別と神の語りかけ』では、聖書を批判とする際の根拠、規範として「預言者的解放の伝統」をあげ、*Gaia and God*ではこれを「持続可能な社会」とすることでエコロジカルな関心を前面に出す。他方、ゲバラは、女性の日常生活を生き抜こうとする闘いから得られた経験知を根拠に聖書を読む。このゲバラの影響を受けたリユースーは、聖書を批判する根拠に、「私たち人間による自然の経験」をおく。「預言者的解放の伝統」(リユースー)も「貧しい人々の日々の経験」(ゲバラ)も、人間に対する関心をその中心に持つが、「持続可能な社会」(リユースー)さらに「私たちの自然の経験」(リユースー)となるに至って、人間以外のいのちも含めたエコロジカルな関心がより前面に出てくる。このような神学は、他の宗教伝統に対しても開かれていく。エコフェミニスト神学はキリスト教の絶対性を手放し、宗教多元主義的な方向に向かっていく。

リユースーが根拠とする「自然のわたしたちの経験」もゲバラが根拠とする女性たちの経験も、聖書の伝統と有機的なつながりをもつことに着目したい。リユースーが指摘するように、神が自然に啓示するという伝統は、新約聖書の

69 なお、リユースーに応答するイトン(Eaton, "Response to Ruether," in *Christianity and Ecology*, 119-120)は、宗教多元主義的であり、キリスト教を絶対化しない、よりラディカルな立場をとることを提唱する。そこでも、地球が啓示的な次元をもつとされ、宇宙論こそが、エコロジカル神学の十分な枠組であるとされる。

宇宙論的なキリスト論のみならず、旧約聖書の契約的伝統にも見られる思想である。また、ゲバラの女性たちの経験も、聖書の人々の経験との対話の中におかれ、これと統合することが試みられる。その際、イエスにだけ注目するのではなく、市井の人々、弱い立場におかれた人々の声こそ聞くべきであるというゲバラの主張は重要である。エコロジカル神学およびエコフェミニスト神学において、旧約聖書、新約聖書を一貫した大きな救いの物語として読むことの重要性はこれまでも指摘されてきている。しかし、これまでの神学は、イエスや神に主要な関心を寄せ、小さな人々の声や人間以外の声には、十分に耳を傾けてこなかった。今後、イエスと関わる人々、動物、植物、地球の声なき声に耳を傾け、私たちの経験と対話させ統合させていく必要があるだろう。